幼児期におけるふりの理解の発達的变化

— 人形に対する認識との関連 —

大塚穂波¹

(¹神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

キーワード：ふり遊び、心的状態、人形

The development of understanding of pretense

Honami OTSUKA¹

(¹Graduate School of Human Development and Environment, Kobe Univ.)

Key Words: pretend play, mental state, stuffed animal

目 的

ふりに対する子どもの理解を巡ってはこれまで多くの議論がなされてきたが、それらは、Leslie (1987) に代表されるように1, 2歳ごろにはふりを理解しているとする立場と、Perner (1991) のように4歳ごろにはふりを理解することはできないとする立場に大別される。これに関して、Lillard (1993) や Harris (1994) は、幼児期初期までのふりの理解は、行為に着目した理解であるとしている。このことから、ふりには実際に外的に表現される行為としての側面と、その行為の背後にある心的状態としての側面があり、両者の理解の成立時期にはずれがあることが想定される。

これをふまえ、本研究では、子どもがふりのどのような側面に対する理解をもっているのかについて、人形を用いたふり遊び場面から検討した。ふり遊び場面において大人が人形を操作する際、大人は自身とは独立した主体として人形を扱い、人形独自の知識状態や要求を表す。子どもが大人のふりの心的状態を理解していれば、こうした人形独自の知識状態や要求に沿ってふり遊びに応じることが可能であると考えられる。一方、ふりの理解が行為的側面に限られていれば、大人が操作する人形とのやりとり自体は成立するが、人形に帰属された知識状態などについては考慮されないと考える。

方 法

参加児 年少児 22 名 (3 歳 9 ヶ月～4 歳 8 ヶ月, 平均 4 歳 3 ヶ月), 年中児 24 名 (4 歳 8 ヶ月～5 歳 7 ヶ月, 平均 5 歳 2 ヶ月) を, 半数ずつランダムに現実条件とふり条件に分けた。

手続き Tomasello & Haberl (2003) を参考に, 以下の 3 場面を経験させた。おもちゃ (Object a～c) は実験者 2 が提示した。
(a) 実験者 1 が人形を操作し, 子どもと Object a を用いて遊ぶ。
(b) 人形を隠した状態で, 実験者 1 と子どもが Object b で遊ぶ。
(c) 実験者 1 が退室している間に, 人形と子どもが Object c で遊ぶ。

最後に全てのおもちゃを同時に子どもの前に再提示した。その際, 実験者 1 が「わあ! それなあに? みせて」と驚きを示し, 実験者 1 が知らない Object c を要求する (**現実条件**)。あるいは実験者 1 が人形を操作しながら人形が驚くふりをして人形が知らない Object b を要求した (**ふり条件**)。以上の手続きを 2 試行連続して行った。そのうち 1 試行は人形を一貫して実験者 1 が操作する人形操作者同一試行であり, もう 1 試行は操作者が途中で実験者 2 から実験者 1 へと変わる人形操作者変化試行であった。

結 果

年齢による反応の差はみられなかったため, 年齢要因をひとまとめにした上で条件ごとに子どもが選択したおもちゃについて分析を行った (Table 1 参照)。その結果, 現実条件では実験者 1 が知らないおもちゃ (Object c) を選択する子どもが両試行とも有意に多かった (操作者同一試行: $\chi^2(2) = 14.77$,

$p < .01$, 操作者変化試行: $\chi^2(2) = 13.14, p < .01$)。一方, ふり条件では, 操作者同一試行のみおもちゃの選択人数に有意な差がみられた ($\chi^2(2) = 6.53, p < .05$) が, 操作者変化試行ではみられなかった ($\chi^2(2) = 0.27, p > .10$)。

次に, 子どもが実験者 1 と人形のどちらに向けておもちゃを提示しているかを検討するため, おもちゃ選択時の視線について分析を行った。いずれかのおもちゃを選択した直後に, 現実条件では 23 名中 21 名 (91.3%) が実験者 1 に視線を向けていた。それに対して, ふり条件では 23 名中 14 名 (60.9%) が人形に視線を向けていた。

Table 1 おもちゃの選択人数

	操作者同一試行		
	Object a	Object b	Object c
現実条件	2 (8.7)	4 (17.4)	17 (73.9)
	2 (8.7)	8 (34.8)	13 (56.5)
	操作者変化試行		
	Object a	Object b	Object c
現実条件	1 (4.4)	6 (26.1)	16 (69.6)
	6 (26.1)	9 (39.1)	8 (34.8)

注. () は%を表す。

考 察

年齢にかかわらず, 現実条件では多くの子どもが, 実験者 1 が知らないおもちゃを実験者 1 に向けて提示した。ふり条件では人形が知らないおもちゃを選択するか否かには個人差がみられたが, 視線反応からは, いずれかの選択したおもちゃを人形に対して提示したことが明らかとなった。この結果は, 大人がふりをしているかどうかを子どもが区別した上で, それに応じて反応を変えたことを示している。ただし, そのような区別は, 人形に帰属された知識状態に沿って反応するというようなふりの心的状態としての側面を理解することとは異なる理解であることが示唆された。

以上の結果より, ふりの心的状態の側面を理解する以前の段階として, ふりの行為的側面に着目し, ふり遊びの中で大人がふりをしているかどうかを区別する段階があることが示された。今後は, ふりの心的状態の側面に対する理解がいつ頃成立するのかを特定し, ふりの理解の発達的变化を明らかにすることが課題である。

主要引用文献

Lillard, A. S. (1993). Young Children's Conceptualization of Pretense: Action or Mental Representational State? *Child Development*, 64, 372-386.